

『最後の四重奏』

P・F・ドラッカー 著 風間 禎三郎 訳



いくつもの建造物からなる巨大教会にたとえるなら、『最後の四重奏』は隠し扉から地下水道に通じる細い一本の回廊を思わせる。滅びた欧州への狂おしいほどの哀切の情が地底湖のように蓄えられている。

彼が何を語ったかは誰でも知っている。マネジメントを語った。イノベーションを語った。マーケティングを語った。戦略を語った。技術を語った。非営利組織を語った。日本画を語った。セルフマネジメントを語った。ネクストソサエティを語った。

しかし、何を語らなかったかは誰も知らない。本人を除いては——。哲人の重たい沈黙に身を委ねるほかはない。

封印していたのか。そうかもしれない。確かに言えると思うのは、この小説には、似たものさえないということである。私が読んだ小説作品のいずれにも、『最後の四重奏』は似ていない。

確かに、他の著作に出てくる記述を想起させるものは、いくつも出てくる。とくに、ほぼ同時期に執筆されたと思われる『傍観者の時代』である。だが、この小説は何ものをも押しつけて暗示的である。

登場人物は、あまりにもいきいきとしている。宗教もイデオロギーもない。キリスト教的禁欲もなければ、マルクスのなまぬ主義もみあたらない。オペラさながら四幕からなり、みながいきいきと刹那的に、利己的に、あるいは官能的にふるまっている。人間のもつ業(ごう)のようなものが徹底的に肯定されている。

『傍観者の時代』で言及される失われたアトランティスの都市ヴェネタのように、それは中空にただぼっかりと浮かぶ巨大な抽象オブジェを思わせる。

ただし、一貫してつきまとうのは、深く蒼い悲しみである。永遠に過ぎ去って二度と戻らない時間への哀憐の情が致死的な毒ガスのように濃く漂っている。ふとしたはずみにあけた小さな扉の奥のむっとする重たい空気とでもいえるのか、その先はとらえがたい深淵が果てしなく続いている。

だからといって、その先に歩を進めてはならない。ましてその探索がドラッカーの何かを明らかにするなど期待してはならない。無駄な努力である。

小説はひたすら暗示する。「君たちの知らない世界があったのだよ」と。

それだけで十分である。

【追記】

ワルシャワのソビエスキ・ホテル(現ラディソン・ブル・ソビエスキ・ホテル)を目にしたのは4年ほど前のことだった。実はその一年前、大通りをはさんだ小さなビジネスホテルに宿を定めていたのだが、何より印象的だったのははす向かいにそびえる堂々たるソビエスキ・ホテルの威容だった。

古いホテルだった。言葉にすると陳腐ながら、絨毯が厚くて、受付の人は素っ気ない。

翌日ワルシャワからベルリンの蒸し暑い車中で、私の前に席を占めたポズナンから乗ってきた女性がいた。あるときから、彼女の手にした一冊の本に意識が吸い寄せられていった。そこには「Haruki Murakami」とあった。ふと私は話してみたい気持ちになった。

「村上春樹を読むのですね」

女性は私に目を向けた。遠いものを見る目だった。女性の名はソビエスキといった。通常ならば、ポーランド語なら、ソビエスカと女性形になるところだ。

ふと『最後の四重奏』に登場する最後の欧州貴族ともいえるソビエスキ公爵を思い出した。確かに彼女の血統は古いポーランドの貴族(ポーランドには貴族の人口が他国と比べてかなり多かったともいわれている)だと言った。そのせいもあり、ナチス治世下ではたとえようもない辛酸をなめ、祖父はアウシュヴィッツにほど近い土地で靴工場を経営していたのだと語っていた。

手にしていた村上春樹は、兄から勧められたもので、スウェーデン語版を読んでいるという。現在はベルリンの広告会社に勤めているけれど、その前はスウェーデンのテレビ局にいたのだと。

「ポーランド人という自覚はない。ただのヨーロッパ人」と彼女は笑った。数日後、Facebookで友達申請がきた。

井坂 康志(いさかやすし)

文明とマネジメント研究所研究主幹